

定本版

山本有三全集

第一卷

編纂

土屋文明

高橋健二

*

題字

土屋文明

生命の冠
坂崎出羽守

.....

© Hana Yamamoto.
1977. Printed
in Japan.

乱丁・落丁本は、ご
面倒ですが小社通信
係宛ご送付下さい。
送料小社負担にてお
取替えいたします。

山本有三全集第一巻

定価三〇〇円

昭和五十二年二月二十日 印刷
昭和五十二年二月二十五日 発行

著者 山本有三

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒102 東京都新宿区矢来町七一
業務部・〇三二六六一五一一
編集部・〇三二六六一五四二一
振替東京四一八〇八番

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 神田 加藤製本

山本有三全集第1卷
目次

穴 一幕

津村教授 三幕

生命の冠 三幕

嬰兒ごろし 一幕

女おや 三幕

坂崎出羽守 四幕

*

淀見蔵 三幕

蔓珠沙華 一幕

編集後記

五

二五

一〇五

一九三

二二七

二六七

三五三

三九

高橋健二 四一七

山本有三全集第1卷

穴

一幕

執筆 明治四十三年八月

発表 明治四十四年三月 「歌舞伎」

初演 明治四十四年二月 牛込高等演芸館

試演劇場

（旧表記のまま。「編集後記」参照）

人物

坑夫 為吉

長三

安太

秀次郎

忠平

鉦車夫 鉄助

坑夫 志望者（俗に山二やまに）

某鉦山の坑内

舞台は夜よりも暗し。

下手より舞台の半部を巖壁にて蔽ふ。其左端に近く巖に造りかけたる梯子あり。上坑に通ずるものなり。巖壁の左の角に寄せて方一間余の枝樋通ぜり。奥より枝樋の左側に添うて下手に流る、坑水の溝あり。水の音潺々たり。樋の口に坑夫、長三、為吉の二人作業しをる。長三は手拭にて頬被りをし、ほろくの股引を穿き、盲目縞の絆纏やうのものを着し、尻にはアテシコを当てたり。右側を採掘しをる為吉は帽も被らず頬被りもせず体には襯衣一枚とアテシコをつけたるのみ。左側、溝の先を少し掘凹めたる所にて為事をなしをる。此有様は岩角に吊しかけたる二箇のカンテラの貧しき光によりて幽に知り得るのみ。鑿の響、水の音に交りて寂寞たる洞の中に一入寂びて聞ゆ。折々火花散る。洞の奥にカンテラの灯三四見ゆ。暗中に迷へる靈魂の如し。

巖壁の端はこゝより稍斜に奥に曲り、四五尺にして更に舞台面と平行になる。そこに方四尺深さ三尺許り発掘したる穴あり。坑夫安太、作業に従事しをる。破れたる帽子を阿弥陀に被り真裸になりてセントウを振ひをれり。絆纏等は傍に脱ぎ捨てあり。此凸凹せる巖壁に添ひて人車鉄道のレール走れり。上手奥まれる巖角の下レールの傍に小シグナル立てり。其頭に赤き燈火取りつけあり。附近二三尺の場所を朧ろに照らす。

長三
為吉
長三

今日はいやに火のとまりが悪いなア。ちエ、縁起でもねえ。(カンテラを取り心を出す)

なアに今日に限った事ぢやねえよ。此処はいつもとほらねえんだ。

何ほ地の底だつて今日は馬鹿に工合が悪いぜ。ヘッ畜生、消しちやつた。為さん一寸火を

くんねえ。

為吉 おいきた。(カンテラを取り長三の方に出す) 併し長さん、お前は無暗と気にし過ぎるからい

けねえ。そんな事氣にかけたつて始まらねえやね。うウンと(力をこめ)やけに岩が頑固だなア。

長三 (やうやく点け終り) 有難う。なアに氣にするつて訳ぢやねえんだが、どうも性分なんだね。それに此七番坑に降りてつからつてものは、病氣も段々悪くなる許りだもんだから、つい何かとかつぐのさ。

為吉 (カンテラを再び巖角に吊し、為事を續く) 病氣の方だつてさうだ。余りくよくしねえ方がいゝぜ。

長三 そりや俺も知つてるよ。心配した所がどうなるもんでもねえたア。そりや承知してるがね……実はなア、為さん、昨日黒え疲の中に赤えものが交つて出やがつたんだ。どうも俺は助からねえかもしれねえ。

為吉 お前は氣が小せえからいけねえ。それつばかりで人間一疋さう死んでたまるもんけえ。それにお前は何だらう、午年だつたらう。俺から見や十歳も若えんだ。

長三 むかし俺の親爺の時代にや、坑夫の寿命は二十七止め、三十は長命だといつたもんだ。それから見れば俺ア余程長生きしてるんさ。だけど俺はまだ死にたかねえよ。

為吉 下らねえこと考へるなよ。

長三 う、もう靡めた。少し為事に取いかゝるべえ。

暫し沈黙、鉤樋の奥にてダイナマイトを爆発させる音、一つ二つ聞ゆ、後にも折々此爆声聞ゆ。

長三 (採掘をつゞけながら) 昨夜なア為さん、俺ア氣になつてしやうがねえから、占ひを見て貰

つたのよ。

為吉 易者ア何んて言つた。

長三 未だ五年は大丈夫だといふんだ。

為吉 そりや豪氣だな。

長三 う、だから此間に金を蓄めて、一度は故郷へ帰りてえと思ふのよ。

為吉 お前、故郷は何処だつけなア。

長三 但馬だ、銀山の近くよ。あつちへ行きア噂もゐるし子供もゐるんだ。どうせ死ぬんなら生れ故郷で死んだ方がいゝ。

為吉 此坑へ来て、お前もう二年位になるの。

長三 う、もうおつつけ二年にならア。今迄に無駄遊びしねえと帰れたんだつけなア。

為吉 体大事にして、うんと残すぞ。

長三 体は大丈夫だんべえか。

為吉 大丈夫だとも。

長三 ほんとに大丈夫だんべか。

為吉 占ひがさういふだから、大丈夫だんべえ。

問。

長三 占ひつてばなう、あの易者がいふには、此七番坑は俺にはよくねいつてんだ。

為吉 空気がよく通はねえからか。

長三 それもあるか知らねえが、午年の者には此処は方角が悪いんださうだ。長くゐると命をと

られるといはれたよ。

為吉 全く方位つてものはあるもんだからな。

長三 だから俺は明日にも掘場を更へて貰はうと思つてゐるんだ。

為吉 それがいゝの、第一こんな下坑に來ちや、お前の様な体には上り下りがたまらねえや。

長三 昇降機で上げ下しして貰へば訳はねえが、一昨日のやうなことがあるからな。

為吉 一昨日つてば、ひでえ事だつたなう。

長三 あれに乗つてた者は一人残らず粉微塵だといふぢやねえか。

為吉 どれが誰の体だか見分けがつかねえ程メチャメチャになつちやつたんだ。俺ア助さんの骨を拾ひに行つたが、分らなくつて弱つちやつたよ。

是より先、遠雷の轟く如き響聞ゆ。やがて人夫一人下手より鉦車を押來る。鉦車の前面にカンテラを吊しあり。レールの上、附近の巖壁等を極めて朦朧と浮かし出す。鉦車押は頬被りをし、綿ネルの襯衣、猿股、及びアテシコをつけ、脚絆を纏ふ。

鉦車夫 坑外は雪だだよ。(言葉をかけしまゝにて行過ぐ)

為吉 おう、さうかよ！ 精が出るこつたなう。

鉦車夫は振向きもせず押行く。

安太 坑外は雪が降らうが雨が降らうがこゝはいつもお天気だ。大方坑外の奴等綿入着て炬燵にもぐり込んでゐる事だんべえ。へえ俺なんか真つ裸で金掘りだ。(俄に手金を捨て、立上り) 一つ聞かうかな。(掘場を出でシグナルのある附近の線路の上に横たはりレールに耳をつけ、鉦車の響を聴く)

長三　（鉦車の過ぎし後）今押してつたのは、鉄つあんのやうだつたな。
う、さうだ。彼奴の根の続くのにも驚いっちゃまふよ。

為吉　あア働いちや、うんと溜るだんべ。羨ましいな。

為吉　さう羨むにも当らねえな。

長三　だつて金銭が出来たら旨えぢやねえか。

為吉　ところが、さう溜らねえから可笑しいや。

長三　あれで矢つ張り遣ふんかね。

為吉　お前鉄公の一件、知らねえのか。

長三　俺ア何にも知らねえ。

安太、レールより起上り樋口に來り、

安太　それ知らねえのは、お前と鉄つあん位のもんだ。

長三　誰だ、安か。此奴アうす馬鹿の癖に生意気な事はかしいつてやがら。

安太　ハッ。長さんは知らねえもんだから怒つてよ。

為吉　お前の知つた事ぢやねえ、彼方へ行つて為事をしろ。

安太　だつて俺ア知つてゐるんだよ。

為吉　手前知つても、こんな事は黙つてゐるもんだ。まだ徴兵検査も済まねえくせに。

長三　これで宿へ出ると女郎買ひに行くんだから呆れつちまはア。

為吉　どうだ。花魁に惚れられたか。

安太　知んねえよ。（樋の右の巖壁の下にずるくと尻をつく）

長三 鉾山の子は餓鬼も女も早いなア。
為吉 何にも楽しみがねえからよ。畜生、いやに石が固えぜ。

カンテラを右手に持ち、上層より梯子に伝はりて坑夫秀次郎、山一を連れて下り来る。服装は二人共長三に略相似たり。

秀次郎 (梯子の上にて) こゝが七番坑だ。此坑のどん底よ。地獄の隣村だ。

山一 大変熱くなつて来ましたね。

秀次郎 底へ下る程熱くなるのよ。こゝはお前、土の底七百尺あるんだぜ。

山一 呼吸が少し苦しくなつて来ました。

秀次郎 さうよ、こゝへ来ると空気が足りねえからな。(梯子よりボンと飛下りる。山一も続いて飛下りる)

秀次郎 (枝樋の口に歩み行き) 精が出るなア。

為吉 ヤア秀さんか、今日は何だい、案内か。

秀次郎 うん山一を連れて廻つてゐるんさ。馬鹿に働くちやねえか。いくら稼いだつてさうは残りやしねえぜ。鉄公の二の舞ひは余り感心しねえからな。

為吉 はゝア、為合せと俺のこの噂はすべだから安心さ。

秀次郎 さうでもなからうぜ。まアいゝ加減しておきねえ。余り坑の内ですぐと坑外でも負けねえ氣になつて余計な事をかせぎやがるからな。

為吉 違えねえ、ちや一服やるかな。(カンテラを取つて煙草の火をつける。カンテラの光が鋭く為吉の顔を照らす)

長三 （長三も手を休め）鉄公の家ぢやほんとに何かあるのか。

秀次郎 さうよなア、鉄公が坑内で鉋を掘つてゐる間に上ぢや誰かが鼻を掘つてゐるのよ。

長三 そりやほんとのことか。

秀次郎 この坑は町の下を通つてゐるんだが、鉄公の家は丁度この天辺あたりかも知れねえ。七百尺の土の下で亭主は真黒になつて働いてると、坑外ぢや鼻はいゝことをしてるのさ。

安太 （尻を上げ）その色男つてのは製鍊所の竹岡さんだアな。

秀次郎 嘘をつけ、安ア知りもしねえくせに。きいた風な事を言やアがら。

安太 嘘ぢやねえんだよ。俺ア竹岡さんに頼まれて使ひをしたことがあるんだよ。

為吉 其男もさうか知れねえ。あの女は幾人も引つ張り込むと見えらア。

長三 誰も鉄つあんに話さねえのかな。

為吉 なアに前に話した事があるんだが、あいつは鼻にからつきし巻かれてゐるんだから、駄目よ。

秀次郎 鉄公のやうにあくせく稼いだつて味噌澁沢に水を入れるやうなもんだアね。

為吉 お茶の木は矢つ張りお茶の木だ。いつになつたつて伸立たねえや。

秀次郎 さう言や他人事ぢやねえ。お前も俺もいつの間にか此坑の中で五十になつちまつたなア。

為吉 坑夫で終るつもりもなかつたんだが……まア何の事はねえ俺達は穴の中に落込つた者なんだ。

秀次郎 違えねえ。銘々に望みも持つてゐるが、たゞ跪いて見た許りで、矢つ張り穴の底につか

つてたんだ。

為吉 若い時、よく色んな事をもくろんだつけなア。

秀次郎 さうよなア。随分色々な事をやつつけたが、どれもみんな穴の中の物真似だつた。